

猪名川に親しむ環境を

提出資料

尼崎市 出本眞次

2003年12月7日

【I】島之内地区に、猪名川と藻川に囲まれた「水と緑の回廊を造ろう」

猪名川と藻川に囲まれた町、島之内地区を水と緑の回廊に囲まれた町にする

回廊は、市民の散策の憩いの場となる

周囲約10kmの土手に色々な種類の樹木を植えて、自然と親しめる環境を創る

セミ、カブト虫、鳥の生息する自然の林

同時に人が安心して歩ける回廊も造る、周囲10kmの散策路

回廊は、市民の散歩やジョギング散策の憩いの場となる。

散歩道として整備して、高齢者や子供、障害者も水辺に親しめる環境を創る。

1 土手での植樹について

種類の違う樹木の植樹により、子供の遊びの空間を広げ、自然との交わりを体験できる様にする。

クヌギの木の植樹	昆虫が棲息し、カブト虫、クワガタ、等との関わり
桜の木の植樹	花見、セミとり、ねこ柳 川原の低木
どんぐりの木	どんぐり拾い、どんぐりでの遊びと創作
常緑樹の植樹	1年中空気の浄化、酸素の放出による環境改善
落葉樹の植樹	木の葉の紅葉、落葉によって季節感の体験

現在の植樹状況は、2地点のみである

藻川と猪名川の分岐地点より猪名川にそって阪神水道から農業公園まで

桜、松等が植えられている

猪名川公園の横

桜等が植えられている

川原での植生は、藻川側と猪名川中流域より上流では、良く保全されているので

これからも引き続き保全が必要、豊かな自然環境を育んでいる

2 水辺に親しめる環境の創出

散策道として回廊を整備する。車椅子や乳母車でも通れる安全な散歩道にする。

親水性の環境により、散策、魚釣り、水辺の生き物(魚、昆虫、鳥、植物など)への関わ

りが実現できる。

現状での河川敷の問題点

橋の下の部分が凹凸ブロック使用のため地面が平らでなくでこぼことなっている

地点がある 10 地点で走行困難と思われるので改善必要

河川敷の幅が、一部地点で散策するのに狭く困難、3Mから1.5M間がある

東園田7丁目（猪名川）から東園田8丁目（藻川）

車椅子が安全に通れる河川敷の幅へ改善

土手で水辺と生活環境が遮断されないような、水辺に親しめる環境の創出

土手から水辺までの安全な階段の設置により、水辺の自然に親しむ

現在 藻川側、15カ所 猪名川側、20カ所設置されています

少ない地点 藻川側、東園田8丁目 猪名川側、田能2, 3, 5丁目

東園田7丁目では、猪名川事務所園田出張所に要望し水辺までの階段が実現して

今では、水辺までの散歩道として多くの人に利用されている（2002年完成）

階段未整備の時は、草の生えた斜面で水辺近くへ行ける人が限られていた

車椅子や乳母車でも水辺に行けるスロープ道の設置

現在のスロープ道は、4カ所のみ

スロープ道でさらに、より多くの人が水辺に近づける

3 散策道としての完全な回廊の創出

完全に1周できる回廊により楽しみ方増大

徒歩での散策や自転車での周遊、自然探索

周走ジョギング、マラソン、大会の開催

現在3カ所（堤防天端）が、未整備で回廊としてつながっていない

藻川、猪名川の阪急電車線路地点、戸ノ内橋地点

3地点の改修で完全な散策回廊の完成

【II】 尼崎市の東部地区田能、園田に

「蛍の棲める水環境の復元を」実現させる

公害の町から蛍の町へ

猪名川の水環境、河川敷を身近な町なかへ

猪名川の豊かな水をふたたび町によびこみ、町の小川を再生させる

環境維持用水樋門を創り、農業用水路を生き返らせる

農業用水路（小川）の自然環境を改善して、メダカや蛍が棲めるようにする

子ども達がホタルの飼育、放流に参加、身近な水路（小川）への愛着を醸成

自然環境を生かした「子ども達の遊び空間の創造」をおこなう

1 対象農業用水路の写真で現状報告（展示、別紙写真資料12枚と地図）

- ①上流域の田能地区には、かろうじて自然の用水路が残っている。環境保全地点
横に田んぼ、非三面張り構造、底は砂地、淡水シジミ、巻き貝等大量に生息
- ②中流域の田能1丁目東園田3丁目、環境改善地点
三面張り構造、水草があり、めだか、カダヤシ、もろこ、巻き貝生息
- ③下流域の東園田4丁目、環境改善地点
三面張り構造、水路の堰きの上流水域は止水の為、水質悪化、濁って底が見えない
カダヤシ、巻き貝、淡水エビ生息

2 水路の現状

水稻農間期には、豊富に農業用水が流れ、水域には、淡水シジミも生息して水草もあり、めだか、カダヤシ、ふな、やご、ザリガニ、等が生息している。
現在でも子ども達が、時々さかな取りなどで水遊びをしている。
遊びの空間としての機能を現状でも維持している。

3 水路の問題点

農業期間を終わると水路の水が渇水

農業用水のため冬場は、用水のポンプを止める 大蔵池、

ほとんどの水生生物は、この期間に死んでしまう。

一部水が溜まっているところにかろうじて生存できる

ほとんどの水路が三面張り構造となっている。

流れに変化がない、ちいさな瀬や淵が無い。水路の横に植物があまり無い

豊富な水生生物の生息が出来ない。

水路の汚れ、投棄ゴミの存在

4 水路の改善

水生生物が年間を通して生息できるように通年での流水の確保、（環境維持用水）

環境維持用水樋門を創り、農業用水路を生き返らせる

三面張り構造の水路の改善、一部の改造でも効果あり

川底に穴を開け水が浸透できるようにして、又石や土を入れ、低い堰きを造る

小さな曲線部分を取り入れ、瀬や淵をつくる

煉瓦1個分の高さの堰きでも、水が確保できる

管理者（農会）との交渉

ポンプの作動の為の電力代金、維持費の調査、

水路の補修、管理の所在、水路の清掃

水路管理の市への移管の可能性の検討

農会の負担の軽減、環境用水との共用
水質の調査をして、ホタルの棲める水質への改善確認
上流域で現在の水質での可能性、中流、下流域の水質改善

5 当面の取り組み

水路の生態、環境マップづくりと、生態案内板の作成設置
水路に対する町民意識のアンケート調査の実施、町内会への協力依頼
水路の意識向上の動機付けの為の水路の「なまえ」の募集、水路への愛着醸成
地元の小学生からの募集、子供会への呼び掛け

6 蛍の飼育、放流

田能には以前繁殖していた蛍は、完全に死滅してしまっているため、外部より移植が必要
蛍は、地域によって個体差があるので、移植種は水系が同一の猪名川、余野川水系のものを
利用する。(西日本と東日本で、光る時間、間隔が異なる。)